

# 瘦身プレッシャーと食行動異常および体型不満の関連

○小野佑希 (神戸学院大学大学院人間文化科学研究科)・村山恭朗 (神戸学院大学心理学部)

キーワード：摂食障害, 食行動異常, 瘦身プレッシャー, 体型不満

## 目的

近年, 国内において, 過剰なやせの遷延化が認められている。厚生労働省の調査 (2016) では, やせが顕著である人は男性では 4.4%, 女性では 11.6%と示されている。特に, 20代女性では, 20%以上がやせ状態であることが報告されている。さらに同報告では, 2006年からの10年間で, やせ女性の割合が急激に増加していると報告されている。やせ状態は, メンタルヘルスの悪化や日常生活機能の低下と関連すること (伊藤ら, 2016) から, 極度のやせを予防することは, 青年や成人の健全な生活を促進するうえで, 重要な視点である。

他者から受ける瘦身プレッシャーはやせや摂食障害のリスク因子の一つである。他者から受ける瘦身プレッシャーとは, 周囲の他者(家族, 友人等)から受ける, 痩せなければいけないというプレッシャーを指す (丸井・村山, 2017)。近年, この他者から受ける瘦身プレッシャーを簡便に測定する自己評価式尺度 (大学生用瘦身プレッシャー尺度, Pressure for Thinness Scale for College Student; PTS) が開発されている (丸井・村山, 2017)。他者からの瘦身プレッシャーの影響は先行研究で示唆されていたものの (Thompson, et al., 2002), 尺度の開発が行われていなかったため, 他者からの瘦身プレッシャーとやせの関連はほとんど明らかにされていない。そこで本研究は, 他者からの瘦身プレッシャー, 体型不満, 食行動異常の関連を検証した。

## 方法

調査対象者 兵庫県内にある私立大学に通う 20歳以上の大学生 452名に調査を実施した。回答に不備がなかった 437名 (男性 143名, 女性 293名, 20.39±1.01歳) を分析対象とした。

調査材料 PTS: 周囲の他者から受ける, 痩せなければいけないというプレッシャーの程度を評定するために用いた。この尺度は 1 因子 13 項目で構成され, 回答形式は 4 件法である。先行研究において信頼性と妥当性が確認されている (丸井・村山, 2017)。体型不満のスクリーニング用尺度 (山宮・島井, 2011): 外見への不満足度を評定するために用いた。この尺度は, 2 因子 9 項目で構成され, 回答形式は 6 件法である。日本語版 EAT-26 (Mukai et al., 1994): 食行動異常の程度を評定するために用いた。この尺度は 1 因子 26 項目で構成され, 回答形式は 6 件法である。

## 結果

食行動異常と瘦身プレッシャーおよび体型不満の関連を検討するために, EAT-26 の得点を基準変数とした階層的重回帰分析を行った。第 1 ステップに年齢と性別 (男性を 1, 女性を 2 とダミーコード化), 第 2 ステップに体型不満と瘦身プレッシャー, 第 3 ステップに, 体型不満と瘦身プレッシャーの交

互作用項を投入した。その結果, 第 1 ステップから第 3 ステップにおいてそれぞれ有意な決定係数の変化が認められた (第 1 ステップ:  $R^2=.080, F(2, 410)=17.785$ , 第 2 ステップ:  $\Delta R^2=.289, F(4, 408)=59.524$ , 第 3 ステップ:  $\Delta$

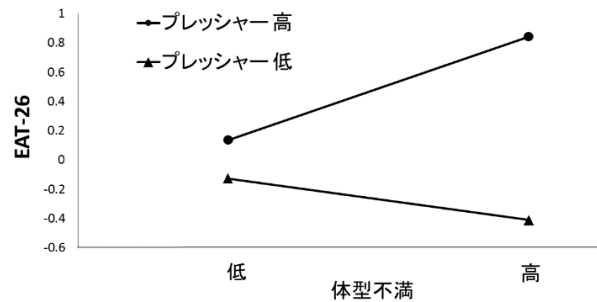


Figure 1. 瘦身プレッシャーの高い者と低い者が示す食行動異常の程度

$R^2=.016, F(5, 407)=50.917$ , すべて  $p<.001$ ). 最終ステップで体型不満 ( $\beta=.219$ ), 瘦身プレッシャー ( $\beta=.496$ ), 体型不満と瘦身プレッシャーの交互作用 ( $\beta=.136$ ) が有意な効果を示した。

体型不満と瘦身プレッシャーの交互作用の影響が有意水準を満たしたことから, 単斜分析を行った。その結果, 瘦身プレッシャーが低い (平均値よりも 1SD 低い) 学生は, 体型不満が強くなっても食行動異常の悪化は認められなかった ( $\beta=.080, n.s.$ )。一方, 瘦身プレッシャーが高い (平均値よりも 1SD 高い) 学生では, 体型不満の増悪に伴い食行動異常が強まることが確認された ( $\beta=.358, p<.001$ )。

## 考察

本研究の結果, 瘦身プレッシャーが低い学生では, 体型不満が強まっても, 食行動異常は悪化しないことが示された。この結果から, 瘦身プレッシャーは他のリスク因子と組み合わせると, 摂食障害のさらなる悪化が予想されることが示唆される。したがって, 瘦身プレッシャーを減弱することが摂食障害の治療・改善に役立つと考えられる。また先行研究では, 瘦身プレッシャーは理想の内化が及ぼす食行動異常の媒介効果が示唆されており (丸井・村山, 2017), 瘦身プレッシャーの減弱を図る介入は, 重要であると考えられる。

利益相反開示: 発表に関連し, 開示すべき利益相反関係にある企業などはない。

倫理的配慮: 本研究は神戸学院大学の倫理委員会等による承認を得ている (承認番号: HEB17-39)。プライバシーの保護に関して, 十分な配慮をしている。

(ONO Yuki, MURAYAMA Yasuo)